2026 年 10 月 30 日

「余白 -Jasmine Nitro Saison-」ラベルデザインについて

あわよくば睡眠欲（秋晴れに白昼夢）



「よみものとのみもの」をテーマに、書籍とお酒の組み合わせを提案することで新しい飲酒体験や読書体験の広がりを持たせる『ALE＆BOOKS&CIDER』。本企画に伴い、反射炉ビヤ醸造「余白 -Jasmine Nitro Saison」のラベルデザインについてセルフ特集します。

元々のラベル構想は、「缶のラベルの中に(実写の)缶があったら面白くね？」からスタートしました。その後に缶と本のあいだを繋ぐ構想までは、時間としてそう長くはかかりませんでしたね。缶から飛び出したイメージが本へ、本から飛び出したイメージが缶へ。いわば「缶を読む」、「本を飲む」ということ。動作主と動詞の反転などを考えています。

両者間を繋ぐラベルは、実際に印刷して貼付・撮影を行いました。缶の「Blank」は余白の英語訳、本から飛び出た文章は「ABC Zine」に寄稿した書評のセルフパロディです。うねりの部分に反射炉ビヤと『ALE＆BOOKS&CIDER』、それぞれのロゴを載せました。

当初はこのままモノクロベースで行こうと思いましたが、中々挑戦的な印象だったので背景と帯部分はカラーに。「淡い青緑×山吹色」でまとめています。

背景は、余白としての透明感（やプリンセスカラー）、「ジャスミン茶」として中国の青磁器っぽいニュアンスなど、諸々な要素が入り混じっています。白色じゃないけど、余”白”。実際に手に取ってみると、背景はただの無地じゃないことがお分かりになるかと。

ちなみに、帯部分は書評元の図書の背表紙より。タイトルの文字も再現しています。

タイトルの「余白」の文字は余白を活かすべくシンプルな線の組み合わせで作成。缶ラベルから飛び出す紙と手は、両手を塞いだソロ撮影だったので、（タイマー機能使えばいいのに）自分のアゴで iPad カメラのシャッターを押しました。
実は、手は元々入れる予定ではなかったのですが、紡ぎ手や読み手、飲み手、書き手の「手」として入れることにしました。

裏ラベル部分のモチーフは、実際の本の裏表紙をモチーフにしています。バーコードがラベル上部に位置している点がポイントです（缶製品のバーコードは、読み込みの関係で基本タテがメジャー)。背景色は今回の『ALE＆BOOKS&CIDER』に倣って橙色に。
あとは缶ビールを世に出すためのあれやこれやを入れ込んで、ラベル完成！といった感じです。かくれメッセージやら裏話やら何やらも少し盛り込んでいます。

「絹の様に紡がれた言葉の其の柔らかさを食む。」今回、僕が書評〜ラベルデザインまで一貫して持っていたイメージです。読み手・飲み手としてだけではなく、書き手・作り手としての解釈や情熱、果ては今の業界や社会情勢や自己意志、幸福論とかなんかも考えながら。いつの間に夜が更けていくので不思議ですねー。
実際のラベルにこのメッセージは登場しませんが(ちょうどロゴ部分の裏に隠れています)、「ABC Zine」にこちら掲載されていますので、ご興味のある方はぜひ拙評をご覧いただけますと幸いです。ラベルの元ネタも分かりますよ。

ところで、余白って何でしょうね。空間的に何もないところ？でもそういう「何もない」こそ、実は「なくてはならないところ」だと思います。そういう余白が塗りつぶされたら多分つまらないだろうし、効率化を求め続けることを至上主義に構えている現代社会では、現にそのような状況が絶えず進行しているような気がしてなりません。
10 年後に、まだ本やビールは「余白」として機能しているでしょうか。どうでしょう？僕は人間の持つ根源的な営み・欲求がある限りは、何らか姿形を変えれども在り続けると思います。で、なければあるいは、そこに残されているのは人ではない何かでしょう。
いつ忘れてもいいように、僕は備忘録として余白に小さな落書きを描いています。

さて…話は長くなってしまいましたが、「余白 -Jasmine Nitro Saison-」、ビールももちろんですが、ぜひラベルも一緒にお楽しみください(もちろん読書のおともにも！)。
ラベルは飲み終わったあと缶から剥がして、クリアファイルや画用紙に貼ってイイ感じにカットすればあら不思議、オリジナルしおりの完成！ぜひお試しくださいまし。
ではでは、またどこかの本屋か飲み屋でお会いいたしましょう。どうぞお元気で！